

「拒否の理由 (2) 一的外れの熱心さー」

1. はじめに

(1) ロマ書9の文脈

- ①イスラエル人は7つの特権を与えられているがメシアを拒否した(1~5節)。
- ②しかし、イスラエル人の一部しか救われていないのは、神の計画である。
- ③神は、権威をもって救われる人たちを選んでおられる。
- ④イスラエルの拒否の理由は、彼らの頑なさにある。

*神の主権による選び

*人間の側の責任

(2) きょうの箇所では、神の義についての無知が取り上げられている。

- ①頑なさは、無知から来ている。
- ②重要であるが、難解な箇所が出てくる。

2. アウトライン

- (1) パウロの願い(1~2節)
- (2) 律法による義(3~5節)
- (3) 信仰による義(6~11節)

3. メッセージのゴール(適用)

- (1) パウロの回心
- (2) 「イエスは主なり」という告白

このメッセージは、ユダヤ人の拒否の理由を学ぼうとするものである。

I. パウロの願い(1~2節)

1. 1節

「兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです」

(1) パウロの個人的願望が表明されている。

- ①ロマ9:1と同じ。

(2) パウロは、同胞の救いを望み、そのために祈っている。

- ①神の選びの教理を取り扱う際には注意が必要である。
- ②その教理は、救われている者には、さらなる確信を与えるものである。
- ③しかし、人間の側の責任を無視してはならない。
- ④神の神秘(誰が救われるか分からない)によって、伝道と祈りの意欲が制限されてはならない

2. 2 節

「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません」

- (1) パウロは自らを証人にしている。
 - ①彼自身が、かつてパリサイ派に属していた。
 - ②目撃者の証言である。

- (2) ユダヤ人たちは、神に対して熱心である。
 - ①「熱心に神に仕えている」(新共同訳)
 - ②つまり彼らは、神についての知識を有している。
 - ③その熱心さが、パウロの痛みの原因となっている。

- (3) しかし、その熱心は知識に基づくものではない。
 - ①知識 「グノーシス」
 - ②ここでの知識は、「エピグノーシス」
 - ③「この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません」(新共同訳)
 - ④「その熱心は深い知識によるものではない」(口語訳)
 - ⑤神に関する知識を持っていたが、キリストにあって神を知ることはなかった。

- (4) ホセ 4:6
「わたしの民は知識がないので滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしはあなたを退けて、わたしの祭司としない。あなたは神のおしえを忘れたので、わたしもまた、あなたの子らを忘れよう」

- (5) 人は、熱心さや誠実さだけで救われるのではない。
(例話) モルモンの家庭にホームステイした。

II. 律法による義 (3~5 節)

1. 3節

「というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです」

(1) 彼らは、神の義について無知であった。

①パウロが、1~8章で論じてきた内容である。

②神は、信仰と恵みによって、人を義としてくださる。

(2) 彼らは、自分自身の義を立てようとした。

①律法を行うことによる義である。

(3) 自分自身の義を立てることは、神の義を拒否することである。

(例話) マサダのケーブルカー (登れる山だと思ふ人、自分の足に自信のある人)

2. 4節

「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです」

(1) 彼らは、4節の真理について無知であった (非常に難解な聖句である)。

「キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである」 (口語訳)

「キリストは律法の目標であります、信じる者すべてに義をもたらすために」 (新共同訳)

(2) 「テロス」というギリシア語が問題

①「終わり」という意味。その場合は、「律法の終わり」となる。

②「目標 (ゴール)」という意味。その場合は、「律法の目標」となる。

③両方の意味があると考えてよい。

*キリストは、律法の要求をすべて満たし、それを終わらせた。

*律法が与えられた目的は、人をキリストに導くためである。

(3) ユダヤ人たちは、その両方を見失った。

①つまり、信仰による義を受け入れなかったということ。

3. 5節

「モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いています」

(1) 律法による義が不可能であることを証明するために、レビ記を引用する。

「あなたがたは、わたしのおきてとわたしの定めを守りなさい。それを行う人は、それによって生きる。わたしは【主】である」(レビ 18:5)

- ①「それを行う人は、それによって生きる」
- ②行わなかったなら、生きられない。
- ③律法を完全に行うことは不可能である。

(2) 律法による義が不可能なら、信仰による義しか救いの道は残されていない。

Ⅲ. 信仰による義 (6~11 節)

1. 6~7 節

「しかし、信仰による義はこう言います。『あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言ってはいけない』。それはキリストを引き降ろすことです。また、『だれが地の奥底に下るだろうか、と言ってはいけない』。それはキリストを死者の中から引き上げることです」

(1) この聖句は、信仰の義について、説明している。

(2) 申 30:11~13

「まことに、私が、きょう、あなたに命じるこの命令は、あなたにとってむずかしすぎるものではなく、遠くかけ離れたものでもない。これは天にあるのではないから、『だれが、私たちのために天に上り、それを取って来て、私たちに聞かせて行わせようとするのか』と言わなくてもよい。また、これは海のかなたにあるのではないから、『だれが、私たちのために海のかなたに渡り、それを取って来て、私たちに聞かせて行わせようとするのか』と言わなくてもよい」

- ①この箇所は、神の義は近くにあることを教えている。
 - *天に上って、それを取って来る必要はない。
 - *海のかなたに渡り、それを取って来る必要はない。

(3) パウロは、この聖句をキリストに適用している。

- ①神の義を得るために、天に上ったり、地の奥底に下ったりする必要はない。
- ②神の義は、人間の業とは無関係に与えられるからである。
- ③キリストはすでに、地上に下られた(受肉)。
- ④キリストはすでに、よみがえられた(復活)。
- ⑤人間の側で何かを付け加える必要はない。

2. 8節

「では、どう言っていますか。『みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある』。これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです」

(1) 申 30:14 の引用

- ① 神の義は、すぐ近く、手を伸ばせば届くところにある。
- ② 口で告白し、心で信じるのが神の義を得る方法である。
- ③ これが、パウロが伝えている「信仰のことば」(福音)である。

3. 9~10節

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」

(1) 極めて重要な聖句である。

(2) 交差対句法 (chiasm)

- ① 口で告白し→心で信じる
- ② 心に信じて→口で告白して
- ③ 告白と信じることが、同時に起こっている。

(3) 信仰の内容

- ① 「神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださった」ということ
- ② 復活は、イエスの教えと行いとが、すべて真理であることを証明する。

(4) 告白の内容

- ① 「イエスは主なり」ということ。

4. 11節

「聖書はこう言っています。『彼に信頼する者は、失望させられることがない』」

(1) イザ 28:16

「だから、神である主は、こう仰せられる。『見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない』」

- ① 信仰だけが救いの条件である。

結論

1. パウロの回心

(1) 同胞たちの今の状態は、かつての自分と同じ。

- ①神に仕えることに熱心である。
- ②その熱心さは、正しい知識に基づくものではない。
- ③熱心であるがゆえに、かえって、神の義を拒否している。

(2) パウロは、ダマスコ途上で復活のキリストと出会った。

使9:3~8

「ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。彼は地に倒れて、『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか』という声を聞いた。彼が、『主よ。あなたはどなたですか』と言うと、お答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならぬことが告げられるはずです』。同行していた人たちは、声は聞こえても、だれも見えないので、ものも言えずに立っていた。サウロは地面から立ち上がったが、目は開いていても何も見えなかった。そこで人々は彼の手を引いて、ダマスコへ連れて行った」

使9:17~19a

「そこでアナニヤは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いてこう言った。『兄弟サウロ。あなたの来る途中、あなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです』。するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落ちて、目が見えるようになった。彼は立ち上がって、バプテスマを受け、食事をして元気づいた」

(3) パウロはこの体験を同胞にもして欲しいと願った。

2. 「イエスは主なり」という告白

(1) 初代教会の信者たちの告白

1コリ12:3

「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、『イエスはのろわれよ』と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、『イエスは主です』と言うことはできません」

(2) 主とは「キュリオス」である。

- ①LXXでは、ヤハウエをギリシア語のキュリオスと訳した(6000回以上)。
- ②旧約聖書に慣れ親しんだユダヤ人信者たちは、イエスをキュリオスと呼んだ。
- ③直訳すれば、「イエスはヤハウエである」という信仰告白になる。

(3) 聖書的キリスト論

- ①キリストの人間性と神性が告白されている。
- ②イエスは、全知全能の神ご自身である。